



Title	<書評> Claire Colebrook, "Irony", Psychology Press, 2004
Author(s)	平田, 公威
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 139-143
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51238">https://doi.org/10.18910/51238</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

**Claire Colebrook*****Irony***

Psychology Press 2004

平田 公威

## はじめに

本稿では、ドゥルーズやデリダらをはじめとする現代思想の研究者であるクレア・コールブックの著書である *Irony* を紹介する。彼女はその仕事のひとつである『ジル・ドゥルーズ』（青土社、2006）は邦訳もされており、著名な現代思想研究者の一人に数えることができるだろう。本書はアイロニーという概念を表題としているが、ここで扱われている話題は決して伝統的な美学や修辞法にとどまらない。

本書は八つの章からなっており、それぞれアイロニーの歴史の変遷、またそれにかかわる概念を紹介している。その内容は、芸術、政治、倫理、ジェンダー論などの多岐にわたっており、アイロニーの射程の広さ、その豊かさを知るに優れている。おおまかにいえば、本書の前半では伝統的なアイロニーについての導入がなされ、後半ではそれを乗り越える諸概念が紹介されている。そうした議論は、伝統的なアイロニーとそれに対抗する風刺とユーモア、そしてポストモダンアイロニーという概念を軸におおまかにまとめることができるだろう。本稿では、これらの概念を辿ることでその主要なテーマを紹介したい。

## 伝統的なアイロニーとしてのソクラテスアイロニーとロマンティックアイロニー

一般的に、アイロニーが語りの技法として注目されたのは、19世紀のドイツロマン主義者らによるところが大きいとされている。しかし、そもそもの起源は、プラトンのソクラテス弁証法にまで遡ることができるのであり、ここにアイロニーの本質を見いだすことができるという。通常、アイロニーは、特定の語を用いてそれとは反対の意味を伝える技法として理解されるが、コールブックによると実際にはそれほど単純ではない。

ソクラテスはソフィストたちを賢者と仰ぎ、彼らに「善」や「正義」について教を請う。しかしながらソクラテスは、彼らが出す答えを矛盾へと導く。そこでソフィストは、ソクラテスが賢者と仰ぐのは建前で、その本心は反対のところにあるのではと思うに至る。このようにして、ソフィストたちは、自らに向けられた「賢い」という語が「愚か」という語を意味していると理解するのである。このように、話者が自らの真意を反対の語に置き換えて話す技法は、いわゆるアイロニー、レトリックなアイロニーとして提示される。

しかしながら、実際には、ソクラテスは自らの意図を表明していない。ただ、「賢い」がその語の通り

の意味を表していないのではないかとソフィストらが問うているだけである。つまり、その戦略的な対話が、実際の文脈を超える意図について問うことを促しているのである。ここに本書が指摘するソクラテスのアイロニーの特徴がまとめられる。第一に、特定の文脈や何らかの定義に還元不可能な理念的な話者、あるいは真なる意図の措定。第二に、理念的な意図が提示されないために、いつまでも問い続けることが出来るという探究の永遠性、第三に、特定の文脈や定義における真意の不在という否定性。そして最後に、対話者に問うことを促し、真理を探究させるという教育的な側面。つまりアイロニーは、日常的な会話や言語の使用を超えて真意を探究するようわれわれに要求するのである。

時を経て、こうしたアイロニーの傾向は、シュレーゲルをはじめとするロマン主義者らによって発展させられることとなる。彼らは、理性的な言表行為に還元できない創作者という絶対的な主体を認めるためにアイロニーを用いた。たとえば、'Don't understand me' という言表行為がある。われわれがいくらこの発話を理解しようとしても、発話者の意図が捉えられることはない。ここではただ、常に断片的で有限である言表行為に汲みつくされない発話者の意図がほのめかされるのである。これは発話に還元されない意図を認める点でアイロニー的であり、ドイツロマン主義者たちは、これを利用して主体や生そのものを無限なものとして肯定しようとするのである。

### 伝統的なアイロニーに対するポストモダンの思想

こうしたアイロニーの傾向は、デリダやポール・ド・マンらに代表されるポストモダンの思想家たちによって批判されることとなる。コールブルックによれば、彼らは、ソクラテスのアイロニーやロマン主義のアイロニーといった伝統的なアイロニーの側面を乗り越え、アイロニーを再定義しようと試みたのだという。端的に言えば、文脈を超越する真意や主体といった理念的なものを立ててしまうアイロニーの側面から脱却せんと試みたのである。

ポストモダンの思想は、超文脈的で絶対的な自己や真理といった審級を退ける。たとえば、ポストモダンの先駆者として知られるニーチェは、「私は踊る」という発話によって、「私」という主体が効果として生じるのだと論じた。同様に、言われるべき何か、真意といったものもテキストにより生じる効果に過ぎない。こうした流れを引き継いだデリダは、われわれの発話行為が常に特定の文脈に関与せざるを得ないという事実を強調する。これは、文脈を持たない発話や、文脈を超越する視点がそもそも不可能であることを意味しており、真理や真意といったものへの到達不可能性を示している。つまり、それは、われわれの言表行為に対するいかなる判断も不可能であることを示している。真に意図されるべきもの、表されるべきものが措定されているからこそ、言表行為やその解釈に優劣が生じるのだが、そうしたものが避けられる以上、あらゆる言表行為が等しく肯定される。また、文脈も常に開かれることとなる。特定の文脈にすべての文脈が収束することはなく、常にわれわれはある文脈を他の文脈に接続することができる。真意や主体性をもとにしたヒエラルキー化や裁きは退けられ、テキストから多様な声が引き出されるようになる。

このように、ポストモダンの思想家たちは、真意や絶対的な主体といった審級を退け、われわれの言表行為が常に多様な文脈に開かれうるということを強調した。彼らは、アイロニーにおける脱文脈的な側面

を強調し、アイロニーを再定義したのである。

ところで、コールブルックはこうした脱アイロニー的な思想と脱構造主義的な思考を重ね合わせている。彼女は構造を固定された文脈として記述しており、伝統的なアイロニーとの共通性を指摘している。そのため、上述したような脱アイロニー的なポストモダンの思考は脱構造主義的な思想とみなされるのである。コールブルックは、ポストモダンの思想家たちを脱アイロニー的、そして脱構造主義的な思想として肯定するのである。

### 風刺とユーモア

ところで、ポストモダンの思想家たちが着目したわれわれが何らかの視点を取らざるを得ないという事実は、われわれの身体という物質性に起因しているのだという。われわれは、不可避免地に身体という物質性を担っているが、これこそがわれわれを特定の文脈（社会的・歴史的）に位置づけるのだという。いわば、われわれの身体という物質性こそが、非文脈的で理想的な言語、純粋な言語を不可能にしているのである。こうした傾向を推し進めることで、アイロニーを乗り越えようとしたのが風刺 (satire) である。

風刺は、われわれの持つ物質性、何らかの視点を取らざるを得ないという事実を強調する。これは、身体の根絶を通じて純粋な理性を実現しようとする理性中心主義や完全に理想的で理性的な言語を拒み、身体性こそが思考を決定するのだと語る。これは、文脈を超える意味など認めず、すべてを文脈に還元しようとする態度だとされる。

しかしながら、ポストモダンの思想が指摘するように、テキストは常にアイロニカルに読みうるのであり、アイロニーは不可避免的である。確かに、われわれが事実として特定の文脈から完全に逃れることはできないにしても、ある程度はその文脈から離脱させられ得るのである。われわれが文脈とそこからの離脱の間で揺れ動く以上、単純に風刺を選択することは難しい。

こうした理由から、ポストモダン以降のアイロニーの射程を検討する必要がある。たとえば、コールブルックは文学における自由間接話法という実践を取り上げている。これにより、特定の文は脱文脈化され新たな文脈に置かれるのであり、われわれは新たにその文を検討することができるのである。コールブルックは、こうしたポストモダンの文学のアイロニカルな操作を現代において可能な倫理の一つとして紹介している。

### ユーモア

本書では、こうしたポストモダンアイロニーや風刺の他に、伝統的なアイロニーに対抗するもう一つの技法が紹介されている。ユーモア (humour) である。伝統的なアイロニーが、言われるべき真意や真理を指定し、発話行為を超越する主体を立ててしまうのに対して、ユーモアは意図されざる意味を引き出す技法である。これは、特定の文脈に意味を還元しようとする風刺とも、また意味を決定することを拒み、常に脱文脈化することを試みるポストモダンアイロニーとも異なった技法である。

コールブルックによると、ユーモアは、前後の文脈や背景、また話者の意図を抜きに、意味を引き出す

技法であるという。彼女は、‘What time is it? The same as usual’という会話を挙げて説明している。この会話の可笑しきは、応答者が質問者の意図や会話における常識を無視するという不条理から生じているのだという。確かに、暗黙裡に共有されているはずの了解なしには会話というものは成り立たない。ポストモダンアイロニーも脱文脈化を強調し、共有される背景を無効にするアイロニーの側面を強調していたが、ユーモアは更に予想外の意味を引き出してしまう。伝統的なアイロニーがわれわれを真意への解釈へと駆り立てるのに対して、ユーモアは、我々が意図しない意味、日常会話においては言うことのできないような意味を表そうとするのである。

ユーモアはこのように話者という主体の力を失効させる。ポストモダンのアイロニーが不可避的であり、同時に完遂不可能な運動であったのに対して、ユーモアは、主体を失効させながらも意味を引出すのである。アイロニーや風刺とは異なり、ユーモアは、われわれが通常言うことのできないものを引出してしまうのである。これは、絶対的な意味を退けるポストモダンのアイロニーや、文脈を超える意味をそもそも認めない風刺とも全く異なる技法であり、ここにユーモアの長所があるのである。

コールブルックは、ドゥルーズの『意味の論理学』の一節を主な参照点としながらこのようにユーモアを論じており、さらにドゥルーズとガタリの哲学を主体主義への批判として紹介している。

## おわりに

以上で本書のおおまかな流れを追ったことになる。本書はアイロニーが持つ射程の広さ、西洋思想におけるその役割を示している。その議論がきわめて広いこと、内容も比較的易しいことから、本書はアイロニーを中心とした議論の入門書として優れているといえるだろう。評者にとって特に興味深いのは、コールブルックが、アイロニーの限界を提示したうえでユーモアの持つ可能性を評価しているという点である。彼女は、ユーモアを言うことのできないことを言う技法、意図しえない意味を表現する技法として提示しようとしている。それもドゥルーズの『意味の論理学』のなかにおいてである<sup>1)</sup>。これはアイロニー論のみならずドゥルーズ読解としても興味深いように思われる。

しかしながら、こうした読解にも疑問の余地がないわけではない。確かにドゥルーズは『意味の論理学』のなかで、伝統的なアイロニーと理念的なもの(「高所」)を結びつけた上で批判し、これに対してユーモアを重要視している。ここからさらに、コールブルックはユーモアを非構造的な概念として記述し、構造主義とユーモアの間に対立を読み取ろうとしている。これには、構造主義の乗り越えをアイロニーの乗り越えとしてとらえようとする上述したようなコールブルックの姿勢が大きく反映しているだろう。事実、ドゥルーズはガタリとの共著においてシニフィアンの思考を批判しているため、構造主義とドゥルーズ自身の哲学には隔たりがあるようである。だが、『意味の論理学』において、ドゥルーズは構造という概念を評価しており、そこで用いられる主要な概念を用いて構造を記述している。もちろん、構造主義とドゥルーズの語る構造という概念が完全に一致するわけではないが、評者には単純に構造とユーモアを対置できるようなとは思えない。ユーモアをドゥルーズの哲学として提示し、これと主体主義を対置させようとするあまり、本書では細かな論に手が行き届いていない点は否めないのではないか<sup>2)</sup>。

もちろん、本書はあくまでもアイロニーを主題としているのであり、ドゥルーズのユーモア論についての詳細な読解を求めるのは不当であるかもしれない。しかしながら、主体主義批判としてユーモアを論じようとするコールブルックよりも論を進め、そこからさらに豊かなユーモアの姿を取り出すことができるのではないだろうか<sup>3)</sup>。

以上のように、構造とユーモアの関係、『意味の論理学』というテキストにおけるその役割を考慮するのであれば、コールブルックがいささか論を急ぎすぎているようにも思える。もちろん、本書の入門書的な側面を考慮すれば、各々の哲学を簡略化し、図式化することは有効な手法であるといえるだろうし、アイロニーについての導入として、本書の果たす役割は決して少なくない。しかしながら、アイロニーを論じる本書においては、それが提示するものにとどまることなく、そこからさらに問いを発して歩を進めることが求められるのではないだろうか。

## 注

- 1) 『意味の論理学』におけるユーモア論に関する本邦の研究としては檜垣立哉氏の「パラドックスとユーモアの哲学」(『瞬間と永遠』159-173頁所収、岩波書店、2010年)が挙げられる。ここでは、『意味の論理学』というテキストの中でのユーモアの哲学的意義が検討されている。
- 2) コールブルックによれば、ポスト構造主義の構造批判の主眼は、彼らが言語モデルを重要視したことや構造からの新たな生成を論じることができないという点に集約されるという。ドゥルーズは「何を構造主義として認めるか」や『意味の論理学』第8セリーにおいて構造に基準を与えているが、それに従うならば、構造に対するそのような批判は適用されないだろう。そのため、コールブルックにとってドゥルーズにおける構造という概念が構造主義を超えていると論じることできるだろう。
- 3) コールブルックも引いている箇所であるが、ユーモアが単なる反主体主義的な技法ではなく、様々な概念と関連して考えるべき技法であるということについては以下を参照されたい。*Logique du Sense*, p.166.

